

# 木の日研修「玉川上水の生き物調べの愉しみ」

【タイトル】 玉川上水の生き物調べの愉しみ

【開催日】 2018年9月6日(木)

【開催場所】 林友ビル 6階会議室

【主催者】 森林インストラクター東京会(FIT28にわとこ会)

【講師】 高槻成紀先生(麻布大学いのちの博物館上席学芸員)

【一文紹介】 玉川上水の生き物(タヌキや糞虫の調査方法とその結果、植物の観察結果など)についての講演

【公開記事】

## ■玉川上水

東京を上空から見ると1本の細い緑の帯が東西に走っている。これが玉川上水である。

玉川上水が完成した江戸時代は、この辺り一帯は民家はほとんどなく、畑と雑木林に覆われていた。

1960年代から人口が爆発的に増え始め、宅地化が進み、緑が急速に無くなっていったが、玉川上水の緑は自然保護運動のおかげで残された。

現在は玉川上水の細い緑の帯と孤立化した大小の緑地が残るのみとなった。

## ■タヌキ

タヌキは珍しくもない動物で、都会でも見かけることの多い動物だが、そのタヌキがいることで周辺の動植物がタヌキとつながって生きているということは、あまり知られていない。植物から見れば次世代を残す種子を運搬してくれるタヌキの役割は大きい。

餌を仕掛けて夜間カメラを向けてタヌキがどこに出現するかを調べたところ、孤立緑地よりも玉川上水の方がタヌキの出現頻度は2倍以上高いことがわかった。

つまり緑地がつながっていることが大切であった。タヌキが住むためには藪や林が必要で、それらがある孤立緑地は最低でも直径200mの面積が必要であるようだ。

## ■タヌキの糞と糞虫

タヌキは同じ所に糞をする。それをため糞という。ため糞を調べれば何を食べているのか、行動半径などもわかる。タヌキは雑食で色々なものを食べているが、果実が一番多く、春から夏は昆虫が多い(3割程度)。津田塾大小平キャンパスは玉川上水に接していて1辺が100m程の正方形だが、そこに4匹のタヌキが生息しているのがわかった。尚、昭和天皇もタヌキの糞を研究されていることを知り、嬉しく思った。

糞しか食べない糞虫で発見されたのは糞食性コガネムシ類のコブマルエンマコガネであった。大きさは1cmにも満たないが、分解力はすさまじく、ピンポン玉位の糞にこの虫を5匹放つと1日で糞は粉々になった。この虫は玉川上水以外の孤立緑地にも7割程度発見できた。

尚、高尾では糞虫の出現率は玉川上水の2倍以上あり、コブマルエンマコガネより大きい体長2cm程のセンチコガネも多数確認できた。

これら糞虫のおかげで森は美しく保たれている。糞虫は子供たちにも人気で観察会や捕獲実験では子供たちは興味津々であった。

## ■玉川上水の生き物

玉川上水は市街地にあるにもかかわらず生き物が多い。調査方法として10分間1つの花を観察し、そこにやって来る虫を調査したところ、皿状の花弁の花には舐めるタイプの虫(ハエ、ハチ等)、筒状の花には吸うタイプの虫(チョウ等)が多くやって来たのが観察できた。

野草は大きく分けて、山の花と野の花に分かれるが、山の花は武蔵野の林が失われる中で、玉川上水がレヒュージ(避難所)になっていることが判明した。

野の花についても武蔵野茅場が失われる中で、同じく玉川上水がレヒュージになっていた。

## ■玉川上水の花マップ

現在、玉川上水の花マップ作りを行っている。珍しい花は少ないが、種類は多い。秋の七草も6種(オミナエシ、キキョウ、クズ、ナデシコ、ハギ、ススキ)存在している。

出現率トップ2はツルボとノカンゾウであった。スケッチも面白い。色の濃淡をつけるとよりリアルに表現できる。

ヘクソカズラやヤブガラシは雑草扱いされているが、よく見ると魅力的な花である。

## ■最後に

エドワードウィルソンがアマゾンの熱帯林伐採について語った言葉が印象的であった。「この行いは経済的な見地からすれば正当化されるかもしれない。しかし料理を作るための炊き付けとして、ルネサンス時代の絵画を使うような行いだ」

玉川上水は高度成長期に杉並より下流は暗渠になったが、その上流は残された。私たちは残された玉川上水をよい形で次世代に残さなければならない。

【報告者名】(28年)鍛冶健二郎

【参加者数】26名



以上です。